

日本國天皇家論

5章 日本書紀 天武天皇

九州天皇家、天武天皇

天武御所は太宰府大極殿

天武紀(下)は新羅の膳極(ひつぎのこと)祝賀大使の記事から始まる。

閏六月の乙酉の朔庚寅(6日)に、大錦下百濟沙宅昭明卒りぬ。人と為り聡明く叡智しくして、時に秀才と称はる。是に、天皇、驚きまして、恩を降して外小紫位を贈ふ。重ねて本国の大佐平位を賜ふ。壬辰(8日)に耽羅、王子久麻芸・都羅・宇麻等を遣して朝貢る。

己亥(15日)に、新羅、韓阿湌金承元・阿湌金祗山・大舍霜雪等を遣して、膳極を賀びしむ。并て、一吉湌金薩儒・韓奈末金池山等を遣して、先皇の喪を弔びたてまつらしむ。其の送使貴干宝・真毛・送承・元薩儒を筑紫におくる。戊申(24日)に、貴干宝等に筑紫に饗たまふ。禄賜ふこと各差有り。即ち筑紫より國に返る。

この記事を整理してみよう。

- (1) 天武2年(673)、6月15日に、新羅から天武即位の祝賀大使がやって来た。
- (2) その使者の名前は「韓阿湌金承元」「阿湌金祗山」「大舍霜雪」等であった。
- (3) 同時に、新羅は先皇の喪を弔うために、「一吉湌金薩儒」「韓奈末金池山」を派遣してきた。
- (4) 新羅からの使者を送る「送使」として(天武)は「貴干宝」「真毛」「送承」「元薩儒」を筑紫に派遣した。
- (5) 6月24日に、送使「貴干宝」等を筑紫で饗応した。禄も賜った。そして使者は筑紫より新羅の國に帰った。

新羅は、673年6月15日、天武即位の祝賀大使と先の天皇(日本國天智天皇)の弔問の為の大使を派遣してきた。これらの大使を送る使として、「貴干宝」「真毛」「送承」「元薩儒」を筑紫に派遣した。この使節団を筑紫で饗(饗応)した。

これらの行為の主語は書かれていないが、むろん天武である。「饗たまふ」「賜ふ」という述語を使っていることから考えても、「饗応」の主語は天武である。禄を与えたのも天武である。天武自身が、新羅からの使節団を送り返す天武側の使者を筑紫で饗応した。これが日本書紀が記した記事である。不思議な記事だが、事実だと読むしかない。

- (1) 673年6月24日に天武は筑紫に居た。
- (2) 天武は、筑紫で、新羅の祝賀大使を送る使節団を接待をした。

天武の御所は筑紫記事が明らかにする

新羅の天武即位祝賀大使はどこへ来たのか。日本書紀は明らかにしていない。不明である。通常は奈良に來たと読まれている。では、何故、天武はわざわざ筑紫まで出かけたのであろうか。確かに送使は筑紫から船に乗って新羅に向かって出港した。だから、天武は筑紫まで送って行き、そこで送別の宴を開いたのだと、考えることはできる。だが、そうだろうか。もし、祝賀大使が奈良まで来ていたのであれば、祝賀大使もその送使も船に乗るのは、当然、「難波(大阪)」の港である。筑紫まで陸路を使い筑紫から船にのるという行路をとることはな

い。別れの宴は当然、「大阪難波」で行われる。既に、「大阪難波」には隋、唐、高句麗からの来賓を迎える迎賓館が存在していた。「大阪難波」で宴を行わず、筑紫で宴を催すことは普通はない。また、いかに、天武即位の祝賀使者とはいえ、天武自身がわざわざ筑紫まで行き、使者を見送るということもないであろう。

では日程はどうか。新羅の大使が来たのは、6月15日である。筑紫饗応は6月24日である。この間、9日間である。15日に天武即位を祝った大使は奈良に一泊もしないで帰路についたのであろうか。天武朝廷はそのような札に欠ける歓迎をしたのであろうか。そうではなかろう。新羅からの祝賀大使に対して答礼の宴が設けられたにちがいない。天武朝廷はこの一番の友好国の使者に対して最大限のもてなしをしたはずである。新羅大使は少なくとも奈良に二泊はしたであろう。すると、大阪難波を出港したのは18日の朝となる。そして、少なくとも、23日の夕には筑紫に着いていたと考えると、大阪難波一福岡博多を6日間で航海したことになる。大阪一博多間は、陸路高速道路で約645kmである。およその計算をすれば、船は一日約100余km進んだことになる。船は昼間しか航海できないから、一日10時間航海してとして、一時間に10kmは進まなければならない。当時としてはこれは天候に恵まれ、風にも恵まれた最高の航海であろう。通常では無理な航海である。もう少し確実な史料が日本書紀斉明紀にある。

伊吉連博徳書に曰はく、同天皇の世に、小錦下坂合部石布連・大山下津守吉祥連等が二船、呉唐の路に奉使さる。己未の俊の七月三日を以て難波の三津浦より發す。八月十一日に、筑紫の大津の浦より發す。九月十三日に、百済の南の畔の嶋に行到る。
(日本書紀齊明天皇五年)

難波とは大阪難波である。筑紫の大津とは博多港である。難波を出て筑紫を出発するまで、39日必要としている。筑紫でどのくらい滞在していたか不明であるが、そう長くは滞在していない。従って、当時、大阪から博多まで30日以上かけて航海したと見るべきであろう。伊吉連博徳の書を参考にしてみても、6月15日に奈良にいた天武天皇が、6月24日に筑紫に居たというのは現実的ではない。天武は奈良に居たのではない。

天武はどこに居たのか。新羅の使節団はどこに来て天武の騰極を祝ったのか。日本書紀編者は天武は奈良に居たと書いてはいるわけではない。確かに、天武紀には「飛鳥寺」「川原寺」「薬師寺」「大官大寺」などが登場する。これらは現在私たちが奈良で見聞する寺の名前である。故に、天武は奈良に居たと理解されている。「天武・奈良在」は疑いようがないと、万人が了承する。だが、日本書紀編者はまた、「天武・筑紫在」の事実を、地名、饗応した人物名、その日時と共に正確に記録している。まるで、筑紫に焦点を当て、天武が筑紫に居たことをことさら取り上げて記録しているかのように見える。

日本書紀編者は天武が奈良に居たと特定できることはどこにも書いていない。寺の名前では決め手にはならない。もし奈良に居たのであれば、大阪から筑紫への航海の様子が書かれたはずである。大阪一筑紫を航海したのであれば、途中、停泊した湊もあったはずである。どここの湊に停泊したという記事があつて当然である。いや、そんな記事は必要ないのだと、いう意見もあろう。だが、天皇が筑紫に出向いたのであれば、少なくとも帰国、奈良への帰国の記事は必要であろう。例えば、天武8年5月5日、天武は皇后と六人の皇子を連れて吉野の宮に出かけている。有名な吉野の誓いがこの時である。そして、5月7日に「車駕、宮に還りたまふ」と記録されている。わずか一日の距離にあった吉野の宮へ出かけた時ですら、出発と帰国の日を記録している。

奈良から筑紫への巡幸は吉野宮へ出かけることとは比べようがない大事業である。往復と滞在に必要な時間、費用、船舶、人手、食糧等簡単なことではない。天皇が長期間都を留守にするのである。天皇がいつ出発したか。天皇がいつ帰国したか。その日時を記録しないわけではない。だが、天武紀には奈良出発の日時、奈良帰国の日時の記事は全く見えない。

天武紀を担当した日本書紀編者は事実を正確に記録した優れた史官だった。しかし、天武は筑紫で饗応したという史実を書くことは出来たが、天武が居た御所がどこか明確に書くことは出来なかった。天武紀の編者は天武の御所を曖昧にした。曖昧にしたが、私たちが探求できる手がかりは残した。それが筑紫記事である。筑紫記事を検討解析すれば、天武の御所に行き着くことができる。天武はどこにいたのか。

天武紀の筑紫記事

天武二年の記事だけが特別な筑紫接待であったというのであれば、この記事の信憑性を疑うということも出来る。或いは、そのような出来事が偶然生じたと、考えることもできる。天武二年の時だけ何か特別な事情で天武は筑紫において饗応したと、想定することもできる。かつて、隋からの使者、唐からの使者は大阪江口で迎えて奈良で饗応された。天武の新羅大使饗応も、この手順であれば問題はない。この場合は、天武は奈良にいたのである。

だが、天武は筑紫で饗応していた。しかも、筑紫饗応は天武二年だけではない。そもそも、壬申の乱に勝利した天武元年(672)の11月に、すでに、新羅から来ていた客人を筑紫で饗応している。

天武が筑紫に居たことを証明する記事は次の如くある。天武は何度も筑紫において各国からの来賓を晩餐会に招いている。筑紫で接待した場所とは「筑紫館」である。この「筑紫館」とは、元西鉄ライオンズのフランチャイズ平和台球場(福岡市中央区)で発掘された古代の迎賓館である。無論、この迎賓館は天武が造ったものではない。430年頃にはすでに造られていた。(財団法人九州環境管理協会の年代測定より)

天武は古代から存在した筑紫の迎賓館を使って新羅の客を饗応していたのである。

- 天武元年(672)11月24日に、新羅の客金押寶等に筑紫に饗たまふ。
- 天武2年(673)6月24日に、貴干實等に筑紫に饗たまふ。
- 天武2年(673)11月21日に、高麗邯子・新羅薩儒等に筑紫の大郡に饗たまふ。
- 天武4年(675)3月14日に、金風那等筑紫に饗たまふ。
- 天武4年(675)8月28日に、新羅・高麗、二つ國の調使(みつきのつかひ)に筑紫に饗たまふ。
- 天武6年(677)4月14日に、送使珍那等に、筑紫に饗たまふ。筑紫より帰る。
- 天武7年(678)12月、是の月に、筑紫國、大きに地動る。地裂くこと広さ二丈、長さ三千余丈。
- 天武9年(680)4月に、新羅の使人項那等、筑紫に饗たまふ。
- 天武10年(680)4月17日に、高麗の客卯問等に筑紫に饗たまふ。禄賜ふこと各差有り。
- 天武10年(681)6月5日に、新羅の客若弼に筑紫に饗たまふ。禄賜ふこと各差有り。
- 天武11年(682)春正月11日に、金忠平に筑紫に饗たまふ。
- 天武11年(682)8月3日に、高麗の客に筑紫に饗たまふ。
- 天武11年(682)8月13日に、筑紫太宰言さく、「三足ある雀有り」とまうす。
- 天武13年(684)2月24日に、金主山に筑紫に饗たまふ。
- 天武14年(685)3月14日に、金物儒に筑紫に饗たまふ。即ち筑紫より帰りぬ。
- 天武14年(685)12月に、新羅の金智祥に饗たまはむが為に川内王等を筑紫に遣す。
- 天武15年(朱鳥元年)4月 新羅の客等に饗たまはむが為に、川原寺の伎樂を筑紫に運べり。
- 天武15年(朱鳥元年)5月29日に、金智祥等に筑紫に饗たまふ。

以上が天武が確かに筑紫で饗応したことを記した記事である。「筑紫に饗たまふ」の主語は天武である。天武自身が新羅の客を晩餐会で接待したという意味である。当然、天武は筑紫に居たから出来たことである。

いや、そうではない。代理を送ったのだと考えることも出来よう。その場合は、その書き方がある。

- 天武10年(681)12月10日に、小錦下河邊臣子首を筑紫に遣して、新羅の客忠平に饗たまふ。
- 是月(朱鳥元年正月)に、新羅の金智祥に饗たまはむが為に、浄広肆川内王・直広參大伴宿禰安麻呂・直大肆藤原朝臣大嶋・直広肆堺部宿禰劍魚直・広肆穗積朝臣虫麻呂等を筑紫に遣す。

このように書かれた記事の場合は、天武が筑紫に出向いたのではない。天武は自分が出かけることが出来ないから、代わりに、川内王を筑紫に遣り、新羅の金智祥を饗応させたという趣旨の記事である。

従って、「筑紫に饗たまふ」という記録は、天武自らが出向いて接待していたことを示している。だが、天武自身の御所は「筑紫(博多)」にあったのではない。筑紫へは御所から出向いたのである。天武は、御所から福岡市中央区の迎賓館まで出向いていたのである。

では、この時、天武は奈良に居たと考えることができるであろうか。奈良から博多まで出向いたと想定できるであろうか。筑紫関係の記事がこれほど溢れるのは天武紀、持統紀のみである。日本書紀には筑紫関係の記事

はほとんどない。例えば推古紀を見よう。推古の時代は長いが、推古紀に登場する筑紫関係の記事は次の六件である。

- 推古3年7月に、將軍等、筑紫より至る。
- 推古10年6月の朔に、將軍來目皇子、筑紫に到ります。
- 推古11年2月4日に、來目皇子、筑紫に薨せましぬ。
- 推古16年4月に即ち大唐の使人裴世清・下客十二人、妹子に従ひて、筑紫に至る。
- 推古17年4月4日、筑紫太宰、奏上して言さく、「百濟の僧道欣・惠彌、首として十人、俗75人、肥後國の葦北津に泊れり」とまうす。
- 推古18年7月に、新羅の使人沙喙部奈末竹世士、任那の使人喙部大舍首智買と筑紫に到る。

來目皇子の筑紫は新羅出兵の為の前線基地だった。來目皇子が亡くなった小高い丘には、現在、碑が建てられている。裴世清の記事は奈良へ来る途中の寄港である。これらの記事における筑紫は目的地ではなく、単なる途中下車駅である。天皇自らが奈良から博多まで出向いて外国の客を接待するなどといった記録は全くない。

天武紀の筑紫饗応の記事は、単なる寄港記事ではない。天武自身による重要な外交行事の記録である。だがこれらの日本書紀の記録が、手を加えられた記録であるとか、捏造された記録であるとは考えられない。日本書紀編者が、天武が筑紫に居た、と書かなければならない理由は見当たらないし、また、日本書紀編者が天武が筑紫に居た、と記事を捏造しなければならない必要性もない。これらの筑紫饗応は史実である。天武はこの時、筑紫に居たのである。

筑紫饗応は国家的行事であった。主催者は天武、主賓は同盟国の新羅国使であった。饗応の場所は「筑紫館」。天武は御所から「筑紫館」まで出向いた。天武の御所と筑紫迎賓館はそう遠くはない。むしろ天武の御所と筑紫の間の距離は奈良と筑紫間ほど離れてはいない。故に、天武は筑紫まで出かけて、新羅や高麗の客をもてなすことができたのである。

筑紫で新羅の客を饗応したのは天武だけではない。持統もまた筑紫で饗応している。

- 持統2年(688)2月10日に、霜林等に筑紫館に饗たまふ。
- 持統2年(688)9月23日に、耽羅の佐平加羅等に筑紫館に饗たまふ。
- 持統3年(689)6月1日に、衣裳を筑紫太宰等に賜ふ。6月24日に、筑紫の小郡にして、新羅の弔使金道那等に設(あへ)たまふ。物賜ふこと各差有り。

これらの筑紫饗応記事の意味は全くおなじである。持統もまた天武と同じ御所にいたのである。

持統の筑紫饗応の記事は持統三年(689)で終わる。以後、持統が、直接、筑紫で饗応した記事はない。この時まで、持統は天武の御所にいたのである。では、一体、天武と持統の御所はどこにあったのか。

天武紀の京

天武は、筑紫(博多)まで度々出かけて、新羅大使を饗応していた。だが、これは物語の本筋ではない。新羅大使は宴会のために筑紫に来ていたのではない。新羅からの大使は天武の御所に詣で、国書を渡すために来ていたのである。筑紫饗応はその後の話である。では、新羅大使が訪れた天武の御所はどこか。天武紀には「京」と書いている。この「京」に天武は居たのである。

- 天武2年8月25日に、賀騰極使金承元等、中客より以上27人を京に喚す。因りて太宰に命せて、耽羅の使人に詔して曰はく、「天皇、新たに天下を平けて、初めて即位す。是に由りて、唯賀使を除きて、以外は召したまはず。則ち汝等の親ら見る所なり。亦時寒浪峻し。久しく淹留めたらば、還りて汝が愁を為してむ。故疾く帰るべし」とのたまふ。

天武2年8月25日に、即位祝賀の新羅大使金承元等、「中客」以上の27人が、「京」に喚されている。召したのは天武である。そして、太宰府の長官を使って、耽羅からの使人に、即位の祝賀大使以外は召さないから、

早く帰れと言わせている。果たして、この「京」とは奈良か。

天武2年の記事に於いて使者を「京」へ招いたことと、太宰府長官への命令との間には、時間的な「ずれ(差)」はない。奈良に居たとすれば、天武の太宰への命令はすぐには伝わらない。時間がずれてしまう。現在のように、電信電話やインターネットで命令が即時に伝わる状況にあれば別である。当時、奈良から太宰府への命令は、いかに早馬で駆けたとしても、10日以上を必要としたであろう。ところが、天武2年の記事にはそのような時間差はない。

天武は、新羅の即位祝賀大使等27人を「京」に呼んだ。だが、耽羅(済州島)からの大使は即位祝賀の使節ではなかった。故に、天武は耽羅の大使には会わず、太宰長官を使って、すぐ帰るように言えと、命じたのである。つまり、二つの出来事は同時に進んでいた。「京に新羅の客を召したこと」と、「太宰府長官の耽羅大使への指示」は同時である。天武のすぐ傍に太宰長官はいた。

これらの記事の真実はこうである。天武は太宰府大極殿に居た。故に、太宰長官が天武のすぐ傍にいたと記録されたのである。天武紀の「京」とは全て太宰府である。

- ・天武5年11月19日に、京に近き諸國に詔して、放生たしむ。
- ・天武6年(677)3月19日に、新羅の使人清平及び以下13人を京に召す。
- ・天武7年正月22日に、耽羅人、京に向く。
- ・天武8年(679)春正月5日に、新羅の送使加良井山・金紅世等、京に向く。
- ・天武9年(680)5月1日に勅して、絁・綿・糸・布を以て、京の内の24の寺に施りたまふこと、各差有り。
- ・天武9年10月4日に、京内の諸寺の貧乏しき僧尼及び百姓を恤(めぐ)みて賑給す。
- ・天武10年(681)7月15日に、皇后、誓願して大に齋して、経を京内の諸寺に説かしむ。
- ・天武10年8月20日に、多禰嶋に遣しし使人等、多禰國の図を貢れり。其の國の、京を去ること、五千餘里。筑紫の南の海中に居り。髪を切りて草の裳きたり。粳稻常に豊なり。一たび植えて兩たび収む。土毛は支子・莞子及び種々の海物等多なり。
- ・天武12年(683)7月18日に、天皇、京師に巡行します。
- ・天武13年(684)3月9日に、天皇、京師に巡行きたまひて、宮室之地を定めたまふ。

これらの記事に登場する「京」「京師」とは大宰府である。太宰府が「京」と呼ばれていたことは、現在の地名に、「京町」が残っていることでも分かる。天武12年の「京師巡行」とは太宰府の巡幸で、13年の宮室の場所を決めたのも太宰府の中である。

もう一つ、天武11年8月の記事を見よう。

- ・天武11年8月壬戌朔(1日)に、親王より以下及び諸臣に令して各法式として用いるべき事を甲さしむ。
- ・甲子(3日)に、高麗の客に筑紫に饗たまふ。是の夕の昏時に、大星、東より西に渡る。
8月3日に高麗の客を筑紫(博多)で饗応した。
- ・丙寅(5日)に、造法令殿の内に大きな虹有り。
- ・壬申(11日)に、物有りて、形灌頂幡の如くして、火の色あり。空に浮かびて北に流る。国毎に皆見ゆ。或いは曰はく。「越の海に入りぬ。」といふ。是の日に、白氣、東の山に起これり。其の大きさ四囲。
- ・癸酉(12日)に、大に地動る。

8月12日に地震があった。この地震は筑紫の地震である。天武7年12月にも筑紫國の地震の記録がある。

是の月に、筑紫國、大に地動る。地裂くること広さ二丈、長さ三千余丈。百姓の舍屋、村毎に多く仆れ壞れたり。是の時に、百姓の一家、岡の上に有り。当于地動る夕に当りて、岡崩れ処遷れり。然れども家既に全くして、破壊ること無し。家の人、岡の崩れて家の避れることを知らず。但し会明の後に知りて大に驚く。

この記事では、地震は筑紫國と明示されている。天武朝廷の書記官は筑紫にいた。そして地震に遭った。それを記録したのである。

- ・甲戌(13日)に、筑紫大宰言さく、「三足有る雀有り」とまうす。
8月13日に足が三本のすずめが見つかったと、筑紫太宰が報告した。中国では三足鳥が古来吉祥とされた。筑紫太宰は同じように、三足雀を吉祥として献上した。
- ・戊寅(17日)に、亦地震る。是の日の平旦(午後4時)に、虹有りて、天の中央に当たりて、日に向へり。
この地震も筑紫である。

- ・癸未(23日)に、詔礼儀言語の状を詔したまふ。且、詔して曰はく、「凡そ諸の考選はむ者は、能く其の族姓及び景迹を検へて、方に後に考めむ。若ひ景迹行能灼然しと雖も、其の族姓定まらずは、考選はむ色には在らじ」とのたまふ。
- ・己丑(28日)に、勅して、日高皇女、更の名は新家皇女、の病の為に、大辟罪より以下の男女并て、一百九十八人、皆赦す。
- ・庚寅(29日)に、百三十余人、大官大寺に出家せしむ。

天武11年(682)8月の詳しい日記である。天武晩年の記事であるが、天武は、11年(682)8月3日に太宰府大極殿に居た。日記には筑紫出国、奈良帰国の記事はない。これらの日記は、時間も、場所も連続している。天武が居た「京」とは太宰府である。太宰府は「京」であった。太宰府は政庁を中心とした条坊都市で、まさに「京」と呼ぶにふさわしい都市であった。



博多は大宰府への玄関口である。新羅からの使人たちは筑紫に到着して迎賓館で迎えられた。そして奥座敷の大宰府に向かった。天武はこの「京」にいたのである。天武は大宰府でこれらの国賓を迎え、ある時は自ら

筑紫まで送った。

筑紫太宰が三本足の雀を献上したのは、天武が太宰府にいたからである。「高麗の客に筑紫に饗たまふ」というその場所は筑紫館である。筑紫館が存在した場所は、福岡市城内舞鶴公園である。

太宰府から舞鶴公園までは約18.1km、徒歩で約3時間47分の距離である。大宰府、筑紫間は御笠川を利用した水上交通が発達していたと思われる。太宰府政庁のすぐ南に御笠川が流れている。御笠川は船の利用が可能だったであろう。ならば、太宰府政庁と筑紫迎賓館は玄関から玄関へと結ばれていたといえる。太宰府は交通形態において最高の場所に建造されていたことが分かる。

太宰府と博多を繋ぐ水路 御笠川



<http://w.nsvie.net/v/00052/>

一方、奈良の玄関口は大阪難波である。日本國は大阪難波宮の近くに各国の迎賓館を建て、そこで隋、唐、高句麗、新羅、百済の客を迎えていた。そして、奈良の京に招き、接見していた。

もし、天武が奈良にいたのであれば、日本國天皇家と同じように、大阪難波の迎賓館で新羅国賓を迎え、接待していたであろう。しかし、天武紀には大阪難波の迎賓館は登場しない。天武は太宰府にいた。故に、天武は、筑紫迎賓館で各国の客を迎え、大宰府大極殿で接見していたのである。

種子島

多禰國の記事がある。多禰國とは種子島のことである。この地理認識が正確である。種子島は、「京」から南の海中、五千余里の所にあるという。確かに、種子島は太宰府の真南の海中にある。「京」を奈良と想定すると奈良の「南の海中」には種子島はない。あるのは遙か南の「沖の鳥嶋」となる。種子島は奈良から見ると「南の海中」ではなく「西南の海中」となる。「京」とは奈良ではなく太宰府である。

大官大寺

天武9年の「京の内の24の寺」と書かれた寺も大宰府に存在した寺である。その一つに大官大寺がある。

- ・天武14年(685)9月25日に、天皇の體不豫したまふが為に、3日、経を大官大寺・川原寺・飛鳥寺に誦ましむ。
- ・朱鳥元年7月20日に、諸王臣等、天皇の為に、觀世音像を造れり。則ち觀世音經を大官大寺に説かしむ。

天武15年(686)は九州天皇家が初めて元号を制定した年である。朱鳥元年である。この年の7月、重病になった天武の回復を祈願して、大官大寺で觀世音經を説いている。朱鳥元年9月9日に天武は亡くなるが、7月に觀世音經を説いた「大官大寺」という名前の寺は、現在、太宰府にはない。だが、この寺で、觀世音經を説いたという記事から考えると、「大官大寺」とは太宰府都府樓遺跡の東部に建っている九州一の大寺「觀世音寺」ではなかろうか。寺の名前が觀世音經に由来しているのは当然である。元々は大官大寺という名前だったが、觀世音經を説いた為、觀世音寺と呼ばれるようになったのであろう。この寺はまさに大官大寺という称号にふさわしい大寺である。

天武14年に、大宰府の天武が病気になった時、経を読んだ寺は、大官大寺・川原寺・飛鳥寺であると記録されている。これらの寺は太宰府かその近くに存在した寺である。これらは奈良明日香に存在した寺ではない。

天武は太宰府に居た。そして太宰府の寺が、病気祈願のためお経を読んだのである。



觀世音寺には日本最古の梵鐘とされる国宝の鐘がある。この鐘と瓜二つで兄弟鐘とされるのが、京都妙心寺の鐘である。この鐘には「戊戌の年、糟屋評造春米広國が鑄造した」という銘文があるという。

「糟屋評」とは日本國天皇家が使用した行政区の名前である。つまり、觀世音寺の鐘と妙心寺の鐘は、日本國天皇家の「糟屋評」の長官広國が造った鐘ということになる。

鑄造年である「戊戌の年」は698年と、考えるのが普通である。だが、「評」は日本國天皇家の行政区名である。その日本國天皇家は、672年の壬申の乱によって滅ぼされた。従って、698年に、日本國天皇家の「評」が使われることはない。日本國天皇家の「糟屋評の広國」が觀世音寺の鐘を造ったのは日本國が太宰府及び九州を統治していた60年前の「戊戌」の年638年であろう。

太宰府の主

太宰府は鏡山猛氏の調査研究から見ても、条坊都市であったと思われる。奈良藤原京も条坊都市であった。藤原京は大極殿を中心とした条坊都市である。藤原宮には天皇が政治や儀式をとりおこなう大極殿、貴族役人たちが参集する朝堂院、天皇の住居である内裏が存在した。藤原宮はこの三つが南北一列に並ぶ配置であった。

現在、太宰府の中心は「政庁」と呼ばれている。「政庁」の建物が復元されているが、これらの建物は「大極殿」、「朝堂院」、「内裏」であったと考えるべきであろう。古代中国王朝の条坊都市を模して作られた太宰府に大極殿が存在しなかったはずがない。朱雀大路も発見されている。朱雀大路の先には朱雀門、門をくぐれば朝堂院、その向こうに大極殿が存在した京であった。

太宰府は一体いかなる京だったのか。太宰府政庁の遺構は大別して三期からなることが明らかになっている。

第一期(7世紀後半) 整然と統一性をもつ堀立柱建物群からなる。この建築法は古代独特の建築技術で、まず地面を溝状に掘り、そこに等間隔に柱を建て、根もとに土を堅く突き固める。そして柱の上に屋根を乗せる。その堅牢性は意外と十分なものがある。

第二期(8世紀初め～10世紀前半)

礎石の上に都の内裏の朝堂院形式の瓦葺き建物群が軒を連れ、政庁の最も充実した時期に当たる。だが天徳4年(941)、藤原純友の焼き討ちにあう。発掘確認の焼土層がこれを証明している。
(太宰府 岡本顕實著)

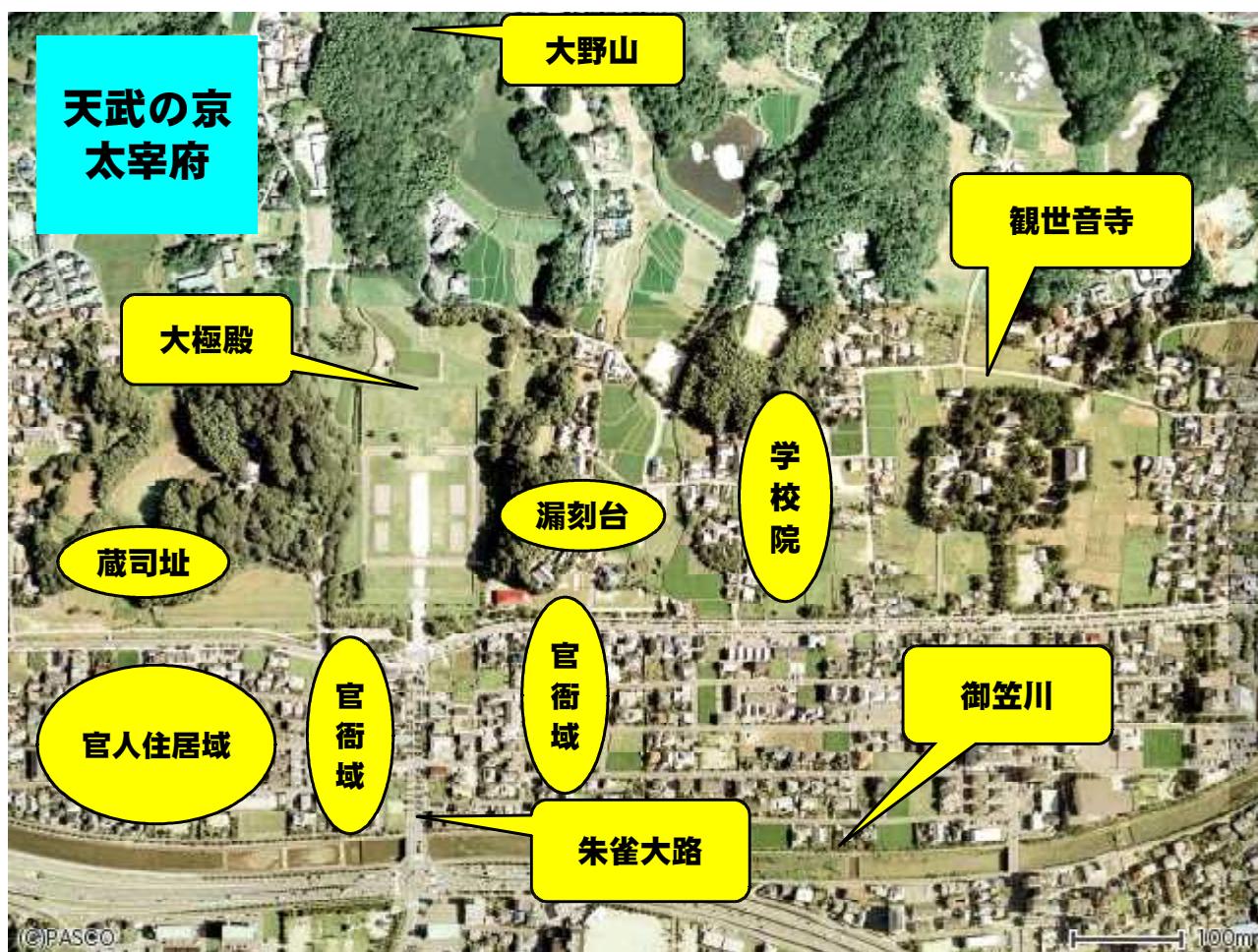
太宰とは総理の意味である。しかし、近畿天皇の太宰という意味ではない。南朝の東晋、宋の天子に対する太宰(総理)の意である。この京を造ったのは古代九州王朝の姫氏である。彼らは中国天子に臣従し、自らを太宰と位置づけていた。九州の「倭國」は天子のために征討した領土である。そして我が一族は天子の領土を治める太宰であるという自己認識の下に「京」を造営し、太宰府と名付けた。第一期の遺構は彼らのものである。

五世紀、倭の五王の一人「武」は、南朝劉宋の天子に上表文をおくり、「使持節都督、倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六國諸軍事安東大將軍・倭王」に除せられている。倭王「武」は九州の「倭國」と朝鮮半島の五カ国、併せて六ヶ國の都督に任命されていた。太宰府が都督府とも云われる所以である。太宰府の初代の当主は古代九州の覇者、姫氏である。

527年、九州姫氏王朝の王「磐井」と日本國天皇家との間で戦いが起こり、磐井が敗れる。九州の姫氏王朝が滅んで、この「京」は日本國天皇家のものとなった。太宰府の二代目の当主は日本國天皇である。日本國天皇家は太宰府長官を任命し派遣した。それが「筑紫太宰率」「太宰師」である。

662年、白村において唐、新羅連合と日本國、百濟連合が激突した。この戦いは日本國、百濟の完敗であった。百濟王は高句麗に亡命し、百濟の臣は日本國に亡命することになる。唐の百濟鎮將は日本國天皇家に大使を派遣し、筑紫に駐屯した。故に日本國朝廷は太宰府に出向き唐との外交に当たっていたのである。

671年、壬申の乱はこの唐と九州天皇家天武の連携によって進められた。乱に勝利した天武は日本國天皇家を滅ぼし、天皇となった。そして日本國天皇の西の御所であった太宰府も手に入れた。天武は太宰府に入り天下の政權を運営したのである。太宰府の三代目の当主が九州天皇家の天武である。



＊九州歴史資料館提供資料より作成

天武の御所は太宰府大極殿

天武は太宰府にいた。天武紀には「大極殿」が現れる。

- ・天武10年(681)2月25日に、天皇・皇后、共に大極殿に居しまして、親王・諸王及び諸臣を喚して、詔して曰はく、「朕、今より更律令を定め、法式を改めむと欲ふ。故、俱に是の事を修めよ。然も頓に是のみを務に就さば、公事闕くことも有らむ。人を分けて行ふべし」とのたまふ。
- ・天武10年3月17日に、天皇、大極殿に御して、川嶋皇子・忍壁皇子・広瀬王・竹田王・桑田王・三野王・大錦下上毛野君三千・小錦中忌部連子首・小錦下阿曇連稻敷・難波連大形・大山上中臣連大嶋・大山下平群臣子首に詔して、帝紀及び上古の諸事を記し定めしめたまふ。大嶋・子首、親ら筆を執りて以て録す。
- ・天武12年(683)春正月2日に、百寮、朝廷拝す。7日に、親王より以下群卿に及るまでに、大極殿の前に喚して、宴したまふ。
- ・朱鳥元年春正月2日に、大極殿に御して、宴を諸王卿に賜ふ。是の日に、詔して曰はく、「朕、王卿に問ふに、無端事を以てす。仍りて対へて言すに実を得ば、必ず賜ふこと有らむ」とのたまふ。是に高市皇子、問はれて実を以て対ふ。薬指の御衣三具・錦袴二具、并て、絁二十疋・糸五十斤・綿百斤・布一百端を賜ふ。伊勢王、亦実を得。即ち自の御衣三具・紫の袴二具・絁七疋・糸二十斤・綿四十斤・布四十端を賜ふ。

この記事の「大極殿」とは、文字通り大極殿である。天武10年2月25日に天武、皇后(のちの持統)は大極殿に居た。そして親王や諸王、諸臣を喚んで律令、法式を改めると詔勅をくださったのである。天武・持統が居た大極殿はどの京の大極殿なのか。むろん太宰府の大極殿である。

現在「政庁」と云われている太宰府の中心部は当時、「政庁」と呼ばれていたのではない。土地の古老でも「政庁」と呼ぶ人はいないようである。天武の時代の人々は「政庁」の建物を大極殿と呼んでいたから日本書紀編者は「天皇、皇后共に大極殿に居しまして」と書いたのである。ここは「政庁」という非歴史的な呼称で呼ばれるべきではない。太宰府の大極殿と呼ばれるべきである。

天武9年の記事には「向小殿」「大殿」、天武10年の記事には「向小殿」「内安殿」「外安殿」、天武11年の記事には「造法令殿」と云う宮殿名が出てくる。これらの名前はいかなる建物をさしているのか不明であるが、大極殿と同じように太宰府の「政庁」内の建造物であろう。

壬申の乱に勝利した天武は古代九州の覇者姫氏王朝が建造した「京」、太宰府の大極殿にいたのである。



太宰府の建物

- ・天武4年(675)の春正月の朔に、大学寮の諸の学生・陰陽寮・外菟寮及び舎衛の女・墮羅の女・百済王善光新羅の仕丁等、菓及び珍異しき等物を捧げて進る。
- ・丁未(2日)に、皇子より以下、百寮の諸人、拝朝む。
- ・戊申(3日)に百寮の諸人、初位より以上、薪進る。
- ・庚戌(5日)に、始めて占星台を興つ。

天武紀はそれまでの天皇紀には登場しない言葉で溢れている。上の記事には、「大学寮」「陰陽寮」「外菟寮」など、漢風の建物が登場する。これらは天武紀で初めて現れる建物である。何故、突然、これらの建物が現れるのか。その理由は、天武が九州天皇家の大宮から、太宰府に遷ったからである。

天武がそれまで住んでいた九州天皇家の飛鳥浄御原宮や吉野宮にはこれらの建物は存在しなかった。だが国主となった天武が移り住んだ太宰府には、これらの漢風の建造物が実在した。太宰府は中国古代王朝呉の王家の一族が建造した京だった。このような建物が存在したのは当然である。太宰府政庁近くに「学校院」の遺構がある。これが「大学寮」であろうか。「群臣に朝庭に賜宴ふ」とは大極殿の南に存在した庭である。ここに

春正月百寮が集い新年を祝賀し宴を催したのであろう。

- ・壬戌(17日)に、公卿大夫及び百寮の諸人、初位より以上、西門の庭に射ふ。
- ・亦是の日に、大倭国、瑞鷄を貢れり。東国、白鷹を貢れり。近江国、白鵝を貢れり。
- ・戊辰(23日)に諸社に祭幣る。

天武4年の正月に天武は太宰府の大極殿にいた。その天武の下に、各国から祝いが届いた。瑞鷄を献上した「大倭國」とは日本國天皇家のかつての都、奈良であろう。白鷹を貢上した「東國」とは行橋市、白鵝を貢上した「近江國」とは小倉南区である。「西門の庭に射ふ」とは、太宰府朝堂院の西門の広場で、弓の試射が行われたのであろう。

- ・天武5年の春正月の庚子の朔に、群臣百寮朔拝朝す。
- ・癸卯(4日)に高市皇子より以下、小錦より以上の大夫等に衣・袴・褶・腰帶・脚帶及び机・杖賜ふ。唯し小錦の三つの階にのみは机賜はず。
- ・丙午(7日)に小錦より以上の大夫等に禄賜ふこと各差有り。
- ・甲寅(15日)に百寮、初位より以上、薪進る。即日に悉に朝庭に集へて宴賜ふ。
- ・乙卯(16日)に禄を置きて西の門の庭に射ふ。的に中るひとには禄給ふこと差有り。
- ・是の日に天皇、嶋宮に御して宴したまふ。

正月に西の門の庭で弓を射て命中した人には賞品を与えている。この日に天武が太宰府から行った「嶋宮」とは、彦島に存在した九州天皇家の宮である。天武は太宰府と彦島との間を行き来していた。



太宰府中門址と大極殿址

天武天皇崩御は太宰府大極殿

- ・朱鳥元年(天武15年686)9月戊戌朔辛丑(4日)に、親王より以下、諸臣に逮るまでに、悉(ことごとく)に川原寺に集ひて、天皇の病の為に、誓ひ願ふと云々。

- ・丙午(9日)に天皇の病、遂に差えずして、正宮に崩りましぬ。
- ・于正(11日)に、始めて発哭る。則ち殯宮を南庭に起つ。
- ・辛酉(24日)に、南庭に殯す。即ち発哀る。

天武崩御の記事である。日本書紀編者は天武は「正宮」で亡くなったと書いているだけである。これではどこで亡くなったかわからない。天武が亡くなったときの皇后(持統)の歌が万葉集にある。

天皇崩りましし時の大後の御作歌一首 159

やすみしし わご大君の 夕されば 見し給ふらし 明けくれば 問ひ給ふらし 神岳の 山の黄葉を
 今日もかも 問ひ給はまし 明日もかも 見し賜はまし その山を 振り放け見つつ 夕されば あや
 に悲しみ 明けくれば うらさび暮らし 荒栲の 衣の袖は 乾る時もなし

一書に曰はく、天皇崩りましし時の太上天皇の御製歌二首 160・161

燃ゆる火も 取りて裏みて 袋には 入ると言はずや 面知らなくも
 北山に たなびく雲の 青雲の 星離り行き 月を離りて

皇后の歌に詠われている山は二つある。「神岳」と「北山」である。まず北山は原文では「向南山」と手の込んだ表現をしている。南に向いている山という表現には、「天子は南面する」という、中国王朝の天子は北に位置するという思想を強調しているように思われる。太宰府「政庁」の北には南に向いている山がある。太宰府の北の山は大野山、または、四天王山と呼ばれている。

四王寺山(標高410メートル)は大宰府の真北に聳える山。大城山或いは大野山とも呼ばれた山。この山は、白村江の戦で唐・新羅軍に大敗を喫し、その追撃によって太宰府の水城が破られる有事を想定して、西暦665年に築かれた朝鮮式山城・大野城が所在した山。山周りに総延長8キロメートルの土塁が回らされた。土塁、石塁、門址、倉庫址、井戸などの遺跡が残る。山上には四天王寺が建てられ、国防を祈った山だった。四王寺山はまた、大宰府官人が朝な夕なに見上げ、幾多の思いを託する山であり続けた。

(http://www.h4.dion.ne.jp/~toso504/fukuoka_sa10.html)

太宰府の北の大野山には四天王寺が建てられて、四天王が太宰府を護っている。「北山にたなびく雲の青雲の」と持統が詠った北山とは大野山であろう。

神岳とは宝満山

では、天武が存命なら今日か明日かと尋ねたと思われる黄葉の美しい「神岳」とはどの山であろうか。太宰府は陰陽道に基づいた風水設計の京であったと云われる。北は玄武、東は青龍、西は白虎、南は朱雀が護る。風水では東北は鬼門である。現在の京都市の場合東北の鬼門は比叡山が護っている。太宰府では鬼・悪霊が侵入する東北の鬼門は宝満山が護っている。

九州の古代王朝(姫氏)は風水の観点から太宰府を建造した。そして東北の鬼門を護る宝満山に神社を創祀した。太宰府が造られた時から宝満山は神の山として崇拝されてきた。天武、持統が「神岳」と崇拝し太宰府から見た山はこの山である。「神岳」とは霊峰宝満山である。

686年9月4日、天武天皇家は親王から諸臣にいたるまで全て太宰府の川原寺に集まり、読経して天武回復を祈願した。しかし、その5日後、9月9日に天武は回復せず、「正宮」で亡くなった。天武が亡くなった「正宮」とは太宰府大極殿、正宮である。

9月9日は太陽暦では10月16日前後となろう。まだ黄葉には早い。太宰府の鬼門を護る神の山、宝満山もまだ色づいていない。もし、天武が生きていたなら、「宝満山の紅葉はまだか。」と、今日も尋ねたことであろう。明日もまた宝満山の黄葉はまだかと見上げたことであろう。その紅葉を見ないうちに天武は亡くなった。

持統は宝満山の紅葉の彩の中に天武の姿をしつとりと歌い上げている。



**宝満山頂
竈門神社上宮**

<http://4travel.jp/domestic/area/kyushu/fukuoka/dazaifu/dazaifu/travelogue/10617257/>

この山は古くは御笠山、竈門山と呼ばれ、標高803m、頂上付近には奇岩、巨石が露頭し、神威を漂わす。古来、霊山として信仰を集め、多彩な祭祀遺物（皇朝銭など）が見つかった。頂上には竈門神社の上宮が、麓に下宮がある。神社の創祠が太宰府の建設時とされる。

「郷土歴史シリーズ no15
太宰府 岡本顕實著」



**太宰府側から見た
霊峰宝満山**

http://www.geocities.jp/la_flute_enchantee_3/newpage9.html

天皇崩りましし時の大後の御作歌一首 159

やすみしし わご大君の 夕されば 見し給ふらし 明けくれば 問ひ給ふらし 神岳の 山の黄葉を

今日もかも 問ひ給はまし 明日もかも 見し賜はまし その山を 振り放け見つつ 夕されば あやに
悲しみ 明けくれば うらさび暮らし 荒栲の 衣の袖は 乾る時もなし

大意 全国を統治する我が君が夕方になればご覧になり、朝になればもう色づいたかとおたずねになったと思われる太宰府の神岳の黄葉を今日もおたずねになるのではないかな。明日もまたご覧になるのではないだろうか。その山を振り返って見ると、夕方はとても悲しく、朝が来ればこころ寂しく暮らす私の喪服の袖は涙に濡れ乾く時はない。

一書に日はく、天皇崩りましし時の太上天皇の御製歌二首 160・161
燃ゆる火も 取りて裏みて 袋には 入ると言はずや 面知らなくも
北山に たなびく雲の 青雲の 星離り行き 月を離りて

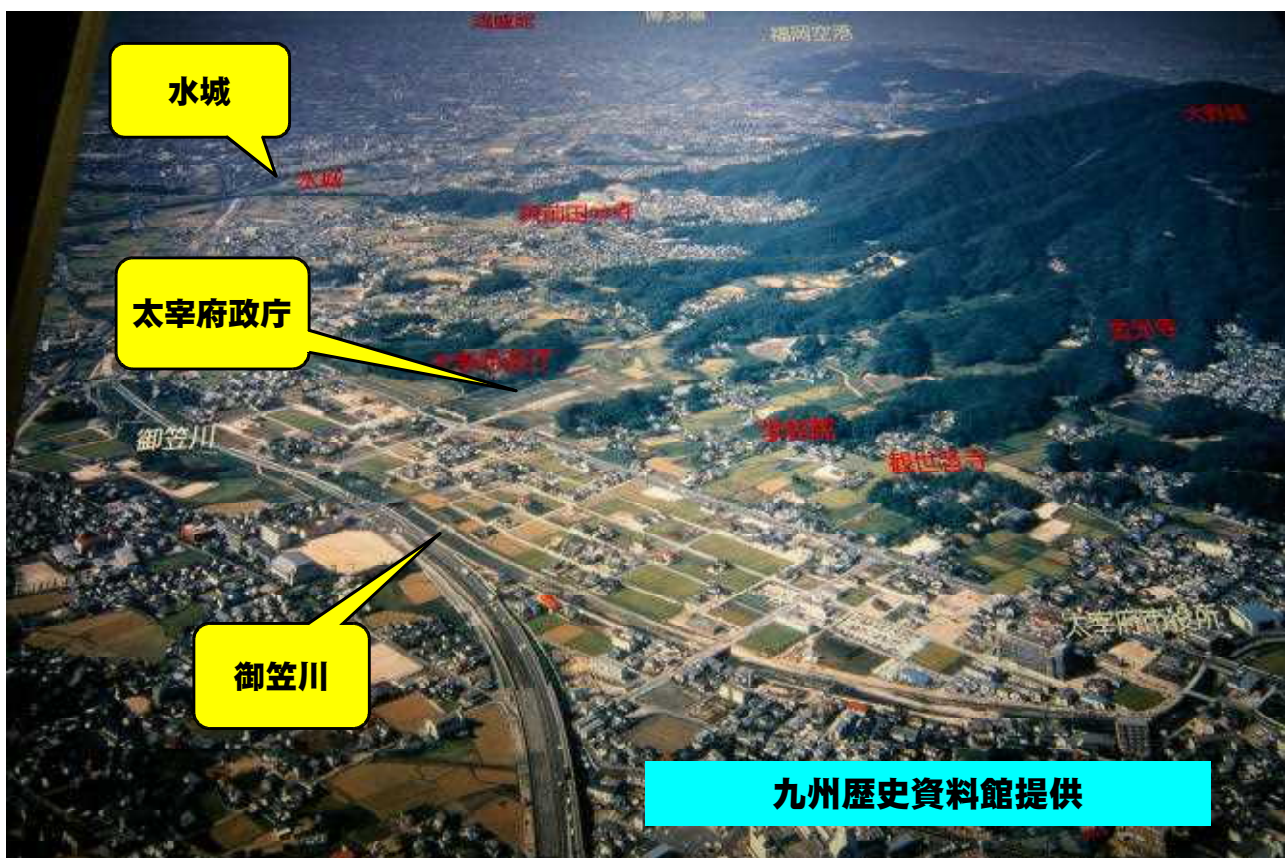
大意 太宰府の北の大野山にたなびく雲が その青雲が星から離れ流れゆく。月から離れ流れゆく。そのように天武天皇は私たちの元から去って行かれたわ。

誤読されてきた天武紀

天武、持統は太宰府に居た。むろん、天武朝廷の重臣も全て太宰府に居た。人麿も太宰府に居た。人麿の「京」での妻(軽の里)も太宰府に居た。天武紀の記事は太宰府の記事である。奈良の記事ではない。

天武は天皇となった。唐、新羅など海外からの客を迎えるにふさわしい堂々たる京に天武は君臨していた。京の中心には政治の府、大極殿、朝堂院が存在し、天武はその大極殿にいた。

京の中心を南北に朱雀大路が走り、東西に区切られ各地域は条と坊によって定められていた。天武紀に登場する「大路」とは朱雀大路のことである。東西にはそれぞれ市が立ち、貨幣経済が発達していた。



太宰府には人々の生活を支える優れた交通形態が存在した。それは水運である。太宰府政庁を出てほんのわずか250mほど南に歩けば、そこには御笠川の流れがある。九州古代王朝姫氏は恐らくこの川を利用した水

運を計算に入れて、太宰府を建造したものと思われる。当然、この川に船を浮かべることが出来たのであろう。

太宰府と海の玄関口、筑紫(博多)とは最高の交通手段で直結されていた。この川は人も生活物資も運んだ。天武も王朝人も海外からの使節も太宰府のすぐ南の湊から船に乗り、筑紫に下ることができた。これは当時の世界では最高の交通形態である。天武天皇は最も近代的な京に住んでいたのである。

奈良飛鳥には多くの史跡、遺構が存在する。しかし、ここに天武の足跡を求めるのは全くの誤謬であり、全く無駄なことであり、全く罪作りな話である。

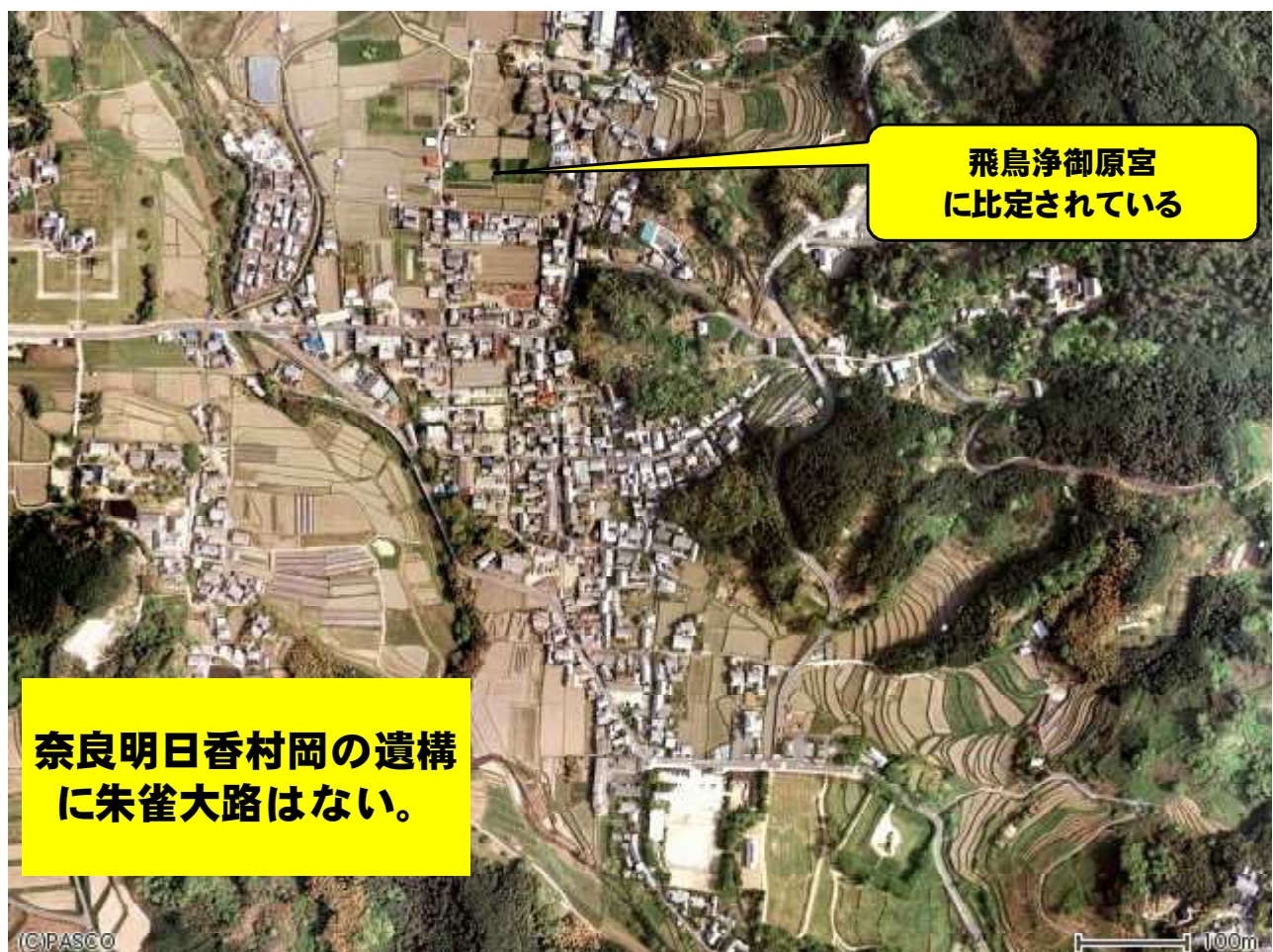
天武紀に「京」と書かれている京とは、決して奈良「飛鳥京」をいうのではない。太宰府である。風水思想によって設計された超近代的な都市、太宰府に天皇天武は居たのである。ここには日本書紀が書き記している大極殿、朱雀大路が存在していた。おびただしい官衙(役所)跡も官人の住居跡も発掘されている。

奈良明日香村岡に「天武飛鳥浄御原宮」だと指定されている遺跡がある。だが、果たしてこの遺跡をもって「京」と謂うことができるであろうか。奈良明日香村、岡の遺跡の南に朱雀大路の遺構は見あたらない。皇后持統が詠った北の山もない。

皇后持統が詠った「神岳」を奈良雷の「雷丘」に比定する人もいる。持統は「神岳」を「明日もかも見し賜はましその山を」と詠っている。天武は住居からその山を毎日眺めていたのである。奈良「雷丘」は低すぎて「飛鳥浄御原宮」から見えることはない。

奈良明日香の遺跡は日本書紀天武紀に登場する「京」及び「大極殿」とは全く異なる遺跡である。これら現存する奈良明日香の遺跡、史跡、遺構は全てかつての日本國天皇家のものである。

私たちの古代認識は根本的に改められるべきであろう。



(1) 飛鳥寺は奈良飛鳥安居院ではない。

天武紀には「飛鳥寺」の記事が多い。「飛鳥寺」と書かれていれば私たちは奈良明日香の安居院を思い浮か

べる。この寺が現在飛鳥寺と呼ばれているからである。故に「飛鳥寺とは奈良明日香村の飛鳥寺のことである。天武は奈良明日香村に居た。」という解釈に疑問を持つ人はいない。だがそれは私たちの勝手読みと云うべきである。

現在飛鳥寺として知られている寺は飛鳥安居院だが、この寺は後代に建造された寺である。元々この地には「法興寺」が存在した。法興とは「仏法を興す」という意味を持つ元号である。仏法が上宮法皇（聖徳太子）によって初めて日本に導入され、そして建立された寺が法興寺だった。法興寺は法興の代に仏法を興した國王（上宮法皇・聖徳太子）によって建立された国立の大寺院であった。日本書紀にはその建造記録は記されているがいつどのようになくなったかは記録がない。法興寺はいつどうしてなくなったかは全く謎である。法隆寺のように火災に遭って焼失した寺ではない。この寺が一塔三金堂の高句麗様式の大寺院であることが判明したのは昭和31年の発掘調査の結果からでした。法興寺中金堂の本尊だったのは現在安居院に伝わる金銅釈迦如来像（飛鳥大仏）である。日本書紀はこの寺については法興寺または元興寺と法号で正確に書いている。

・天智10年10月、是の月に、天皇、使を遣わして袈裟・金鉢・象牙・沈水香・梅檀香、及び諸の珍財を法興寺の仏に奉らしめたまふ。
（日本書紀天智10年）

天智紀の「法興寺」は奈良明日香に存在した寺である。この記事は奈良の記事である。ところが天武紀の「飛鳥寺」は古代北九州の「飛鳥」という地名に由来する寺である。「飛鳥寺」は地名に由来し、「法興寺」は元号に由来する。「飛鳥寺」と「法興寺」とは縁起が全く異なる別の寺である。

天武に登場する「飛鳥寺」は国内の来賓を饗応する場所として使われている。飛鳥寺はどこに存在したのであろうか。

- ・天武6年(677)2月に、多禰嶋人等に飛鳥寺の西の槻の下に饗たまふ。
- ・天武6年(677)8月15日に、大きに飛鳥寺に設齋(をがみ)して、一切経を読ましむ。便ち天皇、寺の南門に御して、三寶を禮ひたまふ。
- ・天武10年(681)9月14日に、多禰嶋の人等に飛鳥寺の西の河邊に饗たまふ。
- ・天武11年(682)秋7月27日に、隼人等に明日香寺の西に饗たまふ。
- ・天武14年(685)5月5日に、天皇、飛鳥寺に幸して、珍寶を以て佛に奉りて禮敬ひたまふ。
- ・天武14年(685)9月25日に、天皇の體不豫したまふが為に、3日、経を大官大寺・川原寺・飛鳥寺に誦ましむ。
- ・持統2年(688)11月5日に、蝦夷、百九十余、調賦を負荷ひて誅る。12月12日に、蝦夷の男女213人に飛鳥寺の西の槻の下に饗たまふ。よりて冠位を授けて、物賜ふこと各々差有り。

壬申の乱に勝利した天武は始めて天皇となった。神武に始まる九州天皇家の天皇として天武は初めて日本の國王の地位に就いたのである。天武が即位したのは「飛鳥浄御原宮」である。この宮の名前に「飛鳥」がある。この「飛鳥」とはどこに存在した地名なのか。

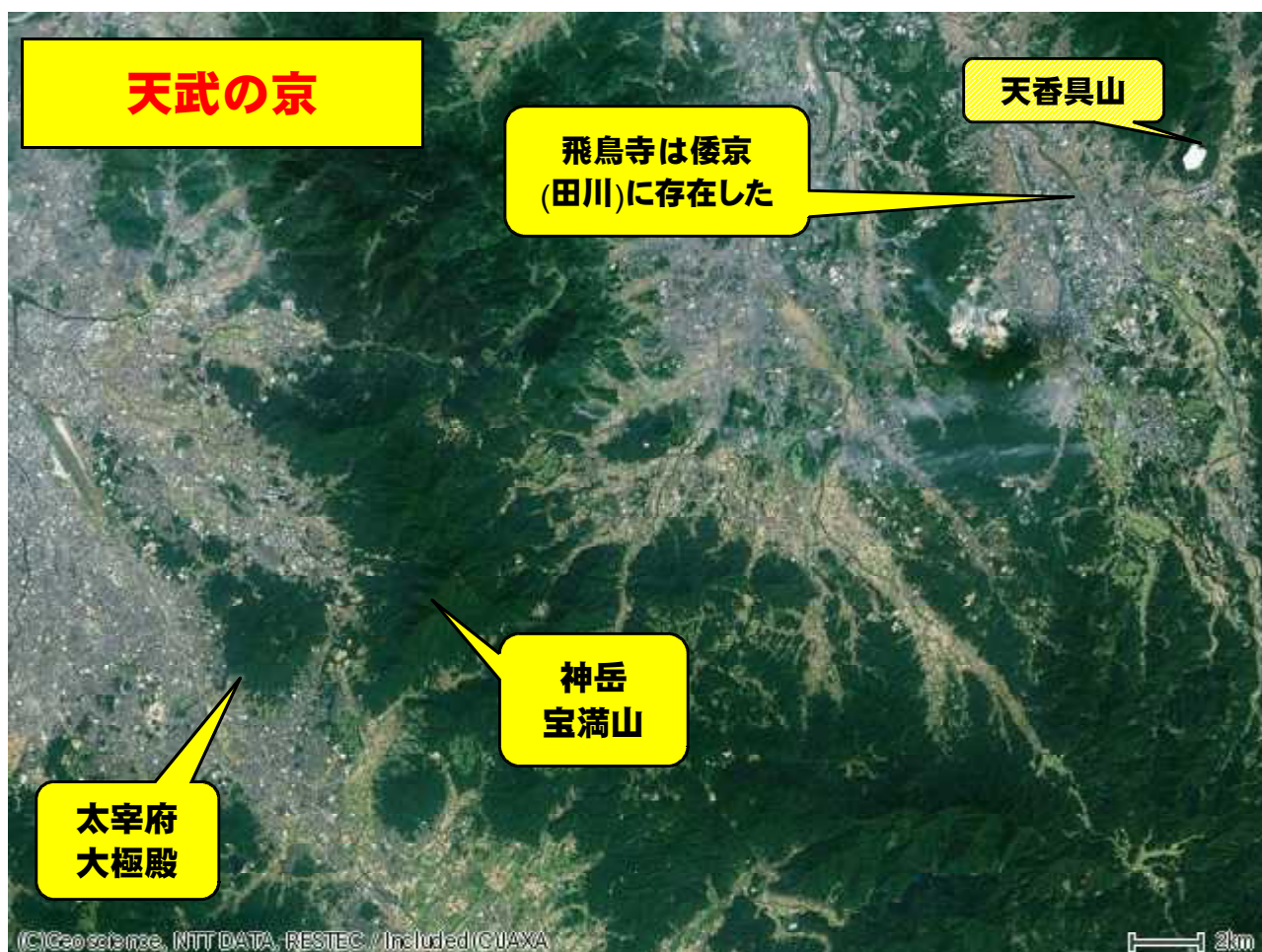
「飛鳥」は天武紀に始めて現れる地名ではない。古事記の履中天皇に見ることができる。仁徳天皇の後に皇位を継いだのが履中天皇である。履中は「難波の宮」に居た。難波の宮とは仁徳の高津宮を謂う。仁徳高津宮は小倉北区に存在した。履中はこの宮で統治していたが、弟が履中の命を狙って宮殿に火を放つ。その時、倭の漢直の祖、阿知直という人物が天皇を助けだし、小倉北区から香春・田川に逃れ「石上神宮」に落ち着く。

逃避の途中、「大坂の山口」という土地が「近つ飛鳥」と呼ばれることになり、倭の石上神宮の近くの土地が「遠つ飛鳥」とよばれるようになった。

「大坂の山口」とは行橋市と香春を隔てる「大坂山」の上り口に当たる場所であろう。そこが「近つ飛鳥」と呼ばれた処である。倭とは神武建国の香春・田川である。九州天皇家の石上神宮はこの町にあった。石上神宮の近くの土地が「遠つ飛鳥」と呼ばれていた。

九州天皇家が存在した北九州に「近つ飛鳥」「遠つ飛鳥」という地名が存在していた。「飛鳥」という地名は九州天皇家の地名である。天武が即位した「飛鳥浄御原宮」はこの飛鳥の地にあった。故に、この名前と呼ばれたのである。

天武紀の「飛鳥寺」とは奈良明日香に存在した「法興寺」ではない。天武紀に「飛鳥寺」と書かれた寺は九州天皇家の國、北九州に存在した寺である。その場所は、天武の宮、「飛鳥浄御原宮」が存在した田川市だと考えるのが妥当であろう。



(2) 川原寺は奈良飛鳥の川原寺ではない。

天武14年、天武が病気になった時、「大官大寺」「川原寺」「飛鳥寺」の三つの寺に、経(観世音経?)を誦ませている。飛鳥寺と並んでもう一つの重要な寺が川原寺である。

- ・天武2年3月、是の月に、書生を聚へて、始めて一切経を川原寺に写したまふ。
- ・天武14年(685)8月12日に、天皇、浄土寺に幸す。13日に、川原寺に幸す。稲を衆僧に施りたまふ。
- ・天武14年(685)9月25日に、天皇の體不豫したまふが為に、3日、経を大官大寺・川原寺・飛鳥寺に誦ましむ。
- ・天武15年(686)4月13日に、新羅の客等に饗たまはむが為に、川原寺の伎楽を筑紫に運べり。仍りて皇后宮の私稲五千束を以て、川原寺に納む。
- ・朱鳥元年(天武15年686)9月戊戌朔辛丑(4日)に、親王より以下、諸臣に逮るまでに、悉(ことごとく)に川原寺に集ひて、天皇の病の為に、誓ひ願ふと云々。

奈良明日香の川原寺は謎の多い寺である。しかし、天武二年の記事に初出する「川原寺」は、奈良明日香の寺ではない。天武天武15年に「川原寺」の伎楽を筑紫に運んでという記事がある。伎楽とは「百済から伝えられた中国の楽舞(頭注)」である。川原寺に伝えられてきた宝物「伎楽」を、奈良の川原寺からはるばる筑紫へ運んだのではない。これはそのような長旅の運送ではない。太宰府から筑紫館へ運んだ記事である。太宰府の川原寺から伎楽を筑紫館に運び新羅の客を饗応したというものである。

天武が重態となった朱鳥元年4日に九州天皇家の人々が川原寺に集い読経している。天武は9日に「正宮」で亡くなったのであるから、川原寺は病気の天武の居た大極殿の近くに存在した寺であろう。

寺号は「川原寺」である。太宰府政庁の南は御笠川と鷺田川が流れこの地域はまさに川原である。川原寺が

どこに存在したか確かめようがないが、奈良明日香の川原寺と太宰府川原寺に何かの関連があったと考えれば、太宰府川原寺とは七世紀日本國から太宰府に左遷された蘇我日向が建てた塔原廢寺がそれかもしれない。

(3)「京及び畿内」とは奈良藤原京である。

天武紀の「京」と云えばそれは太宰府をさす。太宰府は大極殿を中心とした東西2, 6km南北2, 4km(鏡山氏説)の条坊都市であった。まさに「京」と呼ぶにふさわしい。天武は太宰府の大極殿にいた。「向小殿」「内安殿」「外安殿」などよく分からない建物の名前が天武紀に現れるが、これらの建物は太極殿の中のそれぞれの部屋の呼び名であろう。しかし、天武紀にはもう一つ重要な語句がある。「京及び畿内」という言葉である。それは天武5年に初出する。

・天武5年(676)9月10日に、王卿を京及び畿内に遣して、人別の兵を校へしむ。

天武はこの時太宰府にいた。そこで「京及び畿内」に王卿を派遣して兵器を調べさせたというのである。「京及び畿内」とは大化の改新の詔勅に示された独特の表現である。

二年の春正月甲子の朔に賀正礼畢りて、即ち改新之詔を宣ひて曰はく、「其の一に曰はく、昔在の天皇等の立てたまへる子代の民・処々の屯倉、及び、別には臣・連・伴造・国造・村首の所有る部曲の民・処々の田庄を罷(や)めよ。仍りて食封を大夫より以上に賜ふこと、各差有らむ。降りて布帛を以て、官人・百姓に賜ふこと、差有らむ。又曰はく、大夫は、民を治めしむ処なり。能く其の治を尽すときは、民頼る。故、其の禄を重くせむことは、民の為にする所以なり。

其の二に曰はく、初めて京師を修め、畿内国の司・郡司・関塞・斥候・防人・驛馬・伝馬を置き、鈴契を造り、山河を定めよ。凡そ京には坊毎に長一人を置き。四つの坊には令一人を置き。戸口を按へ検め、奸しく非しきを督し察むることを掌れ。其の坊令には、坊の内に明廉く強く直しくして、時の務に堪ふる者を取りて充てよ。里坊の長には、並に里坊の百姓の清く正しく強幹しき者を取りて充てよ。若し当の里坊に人無くは比の里坊の簡び用いることを、聴す。凡そ畿内は、東は名壑の横河より以来、南は紀伊の兄山より以来、西は赤石の櫛淵より以来、北は近江の狭々波の合坂山より以来を、畿内国とす。

(日本書紀孝徳大化元年)

大化の改新の詔勅の第二条に「京師」「坊」が出る。「坊」とは条で囲まれた区画をいう。この詔勅は条坊都市の存在を前提とした詔勅であることはあきらかである。坊が存在していないのに「坊令」「坊長」を定めたという架空の法令ではない。孝徳2年には奈良に条と坊をもった京が実在していた。この京は無論平城京ではない。藤原京である。大化の改新は政治改革と共に藤原京造営がセットで押し進められたのである。その第二条に「畿内」の東西南北が定められている。

東－名壑の横河　　南－紀伊の兄山　　西－赤石の櫛淵　　北－近江の狭々波の合坂山

畿内とはこの範囲を云う。孝徳紀の「京」とは藤原京である。畿内とはいわゆる近畿地方をさす。天武もこの大化の詔勅の用法にもとづいて「京及び畿内」を使っているのである。天武は当然奈良の都が「京」と呼ばれ、「畿内」がいれば近畿をさすことは知っていた。藤原京は天武が倒した日本國の王都だった。東の奈良には藤原京が存在する。西の筑紫には太宰府が存在する。天武は太宰府において日本國を統治し、「京及び畿内」にも使者を派遣することによって詔勅を伝えていたのである。

・天武6年(677)5月、京及び畿内に雩(あまごい)す。

・天武10年(681)正月19日に、畿内及び諸国に詔して、天社地社の神の宮を修理らしむ。

・天武12年(683)12月17日に、詔して曰はく、「諸の文武の官人及び畿内の有位人等、四の孟月に、必ず朝参せよ。もし死病有りて、集はること得ずは、當司、具に記して、法官に申し送れ」とのたまふ。

・天武13年(684)2月28日に、浄廣肆廣瀬王・小錦中・大伴連安麻呂、及び判官・録事・陰陽師・工匠等を畿内に遣して、都つくるべき地を視占しめたまふ。

- ・天武14年(685)9月11日に、宮處王・廣瀬王・難波王・竹田王・彌努王を京及び畿内に遣して、各人夫の兵を校へしめたまふ。
- ・天武14年(685)10月12日に浄大肆泊瀬王・直広肆巨勢朝臣馬飼・判官より以下、并て二十人を以て畿内の役に任す。

これら「京及び畿内」はかつての日本國天皇家の「京及び畿内」である。「畿内の有位人」とは、日本國天皇家の旧重臣をさすのであろうか。この時、日本の國主は天武だった。國主天武は太宰府に居た。従ってこの間、日本の首都は太宰府だったといふことができる。



人麿、妻と別るる歌

柿本朝臣人麿、石見國より妻に別れて上り来る時の歌 二首

131 石見の海 角の浦廻を 浦なしと 人こそ見らめ 潟なしと 人こそ見らめ よしゑやし 浦はなくとも よしゑやし 潟はなくとも 鯨魚取り 海辺を指して 柔田津の 荒磯の上に か青なる 玉藻沖つ藻 朝羽振る 風こそ寄せめ 夕羽振る 波こそ来寄れ 波のむた か寄りかく寄り 玉藻なす 寄り寝し妹を 露霜の 置きてし来れば この道の 八十限毎に 萬たび かへり見すれど いや遠に 里は放りぬ いや高に 山も越え来ぬ 夏草の 思ひ萎へて 偲ふらむ 妹が門見む 靡けこの山

反歌二首

132 石見のや 高角山の 木の際より 我が振る袖を 妹見つらむか
133 小竹の葉は み山もさやに 乱るとも 我れは妹思ふ 別れ来ぬれば

名歌というにはあまりにも凄まじい激情である。この歌がどこで歌われたか正當に理解されていないにもかかわらず、名歌であることには変わらない。人麿は妻との別離の歌を、「上り来る時」に作った。「上る」とは、當然、京

へ上ることをいう。人麿は石見國で結婚していた。上京は結婚後それほど年数が経ってなかったと思われる。人麿はいわば新妻を石見國に残して単身京に上っていったのである。

この石見國とは九州天皇家の石見國のことで、近畿天皇家の石見國(島根県)ではない。「石見」とは本来「岩の海」の意である。「岩の海」は、「淡の海」の対となる表現である。九州天皇家の「淡の海」とは小倉南区の曾根干潟の穏やかな淡い海をいう。一方、「岩の海」とは、荒々しい苅田町の周防灘の海をいう。

苅田町の「角の浦」は周防灘に面している。穏やかな海ではない。荒々しい岩の海である。よって、人々は苅田町を「岩の海の國(石見國)」と呼んだのである。歌にもそれが詠われている。人は石見にはよい浦(湊)がないという。人は石見の海には潟(干潟)もないという。だが鯨を捕る船は荒々しい海へ出て行く。この海とは周防灘である。周防灘では嘗て捕鯨が盛んであった。

九州天皇家の石見國とは苅田町である。人麿も妻もこの町に住んでいた。なぜなら、苅田町は人麿の故郷だったからである。人麿は苅田町の倭歌の名家に拾われ育てられ、歌人として成長し、苅田町の妻を娶った。その故郷を離れて人麿は上京した。人麿が上っていった京とは太宰府である。この時、天武も持統も太宰府にいた。天武が太宰府で天下を治めるようになったのは壬申の乱に勝利したからである。人麿は高市皇子への挽歌で壬申の乱を歌っている。人麿は北九州で戦われた壬申の乱を知っていた。故に、乱の内実を具体的に詠うことができたのである。

壬申の乱に勝利した天武は田川の飛鳥浄御原宮から太宰府に遷った。人麿は天武政権に出仕するために太宰府へ上ることとなった。すでに人麿の歌の才はあまねく知られていた。この歌は故郷苅田町に新妻を残し単身太宰府の天武朝に出仕するために上っていった時の別れの歌である。別離の路は陸路と思われる。

当時、苅田町から太宰府への陸路は行橋市を経由するのが一般的な交通路であった。人麿も苅田町から行橋市に向かい田川市を経て太宰府に入っていたと思われる。約64kmの道のりである。歌はこの途上で歌われた。そして人麿が再び石見の國へ還った時は石見の守であった。いわば故郷に錦を飾ったのである。しかし最後に石見に帰った時は流刑の身の上であった。人麿は石見の妻と生きて再会することなく石見國の東海(周防灘)の畔で死んだ。石見國と太宰府を結ぶ途は栄光への途であった。が、また悲しく辛い還り途でもあった。

天武は太宰府を皇居として北九州の世界に生きた。人麿が生きた世界もまた九州天皇家であった。

